



## 臨床心理士の巻

中谷 恭子

### I. はじめに

「臨床心理士」は、心理学にもとづく知識や技術を用いて“こころ”の問題に取り組んでいます。文部科学省の認可する財団法人日本臨床心理士資格認定協会が実施する試験に合格し、認定を受けることで取得できます。1988年から2012年4月1日までに日本全国で2万4千666人が認定を受け、各分野で働いております。

### II. 臨床心理士に求められる専門行為

臨床心理士に求められる専門行為とは、①種々の心理テストなどを用いての心理査定技法や面接査定に精通していること ②臨床場面で面接援助技法を用いて的確な対応・処置できる能力を持っていること ③心の健康活動に役立つ人的援助システムの構築や検討にかかわる能力を保持していること ④自らの援助技法や査定技法を含めた多様な心理臨床実践に関する研究・調査・発表などを行うことがあげられます。また、こうした4種の業務について、さらなる自らの心理臨床能力の向上と、高適な人格性の維持、研鑽に精進するために、「臨床心理士倫理綱領」の遵守、5年ごとの資格更新制度などが定められています。

### III. 心理判定員として兵庫県立淡路病院へ

私は、東北大学教育学部 教育心理学科 心身欠陥学講座に学び、長らく重症心身障害者のコミュニケーションの発生・発達に関する研究を

しておりました。修士課程を修了し、縁あって人口約17万人（震災後は人口が減少し、2013年4月現在約14万6千人）の淡路島にあるベッド数約400床の総合病院、兵庫県立淡路病院（以下、淡路病院）に「心理判定員」として赴任いたしました。架橋以前の淡路島は、自宅に鍵をかけずに生活する家庭も多く、病院の近くでも牛の散歩する姿が見られるような平和でのかな島でした。

心理室は中庭に建てられた小さなプレハブの一室にありました。ひと月ほどの地方公務員初任者研修を終えて着任した時、最初にやって来たのは耳鼻科から紹介された心因性難聴の男性でした。続いて1型糖尿病の幼児とご家族……心理室を訪ねる患者さんは、交通事故後のリハビリに意欲が湧かない青年、膠原病の女性、ダウン症の乳児とそのお母さん、精神科入院中の統合失調症の方々や小児科入院中の子ども達……各診療科から紹介されてくる患者さんは年齢も病歴も相談内容も多種多様でした。臨床心理士の資格が誕生して間もない頃ですから、臨床心理士を病院でどのように活用するのか定まっていなかったのでしょう。上司は「診療部長＝内科・脳外科・放射線科 etc」でしたので心理室の場所さえご存知ありませんでした。

新米心理士の私は、何もわからないにもかかわらず、来る者は拒まずすべての依頼を受けておりました。一人職場ですから相談する仲間はおられません。頼りは事例の載った専門誌や心理学の書籍のみでした。初学者、臨床経験の浅い専門職にとって、書籍に精神的な背骨を支えてもらうことがどれほど心強かったか、と振り返

なかたに きょうこ：兵庫県立光風病院 地域ケア部  
ダイケア科

り深く感謝する次第です。専門書の中にある「臨床心理士の身上は積極的傾聴」に勇気づけられ、苦手な内容でも傾聴姿勢を保ちつつ取り組むように毎日を過ごしました。総合病院で出会う患者さんの抱える問題は多岐にわたり、その都度多くの書籍にあたりました。

医療現場では、問題解決型の思考で「doing」の取り組みが多い中、臨床心理士は患者さんの心と共にいる「being」の姿勢を保とうとします。「待つ」ことが大切な仕事でもあります。さらに、病院の中だけではどうにもならない問題のために、例えば、発達障害児を育てる家族と親子で遊ぶ機会を作ったり、精神障害者の過ごせる居場所を作ったり、学校の中で先生方と環境調整をしたり、自宅から出られない患者さんに会いに行ったり……臨床心理士の管理体制が曖昧なのをよいことに、病院と地域の間をつなぐ役割も担いました。後に台頭してくるPSW (Psychiatric Social Worker 精神科ソーシャルワーカー) やMSW (Medical Social Worker 医療ソーシャルワーカー) の仕事を兼務していた時期だと思います。さらに、1995年には阪神・淡路大震災、2004年には平成16年台風23号の水害と大きな自然災害にも遭遇し、その後長きにわたる心のケアを担うことにもなりました。この経験が今もなお各地での被災者支援に結びついていると実感します。

### Ⅲ. 兵庫県立光風病院への異動

淡路で迎えた18年目の春、永住するつもりで家を契約した翌日に、非情にも兵庫県立光風病院(以下、光風病院)への転勤辞令が下りました。1週間で次の職場に異動するため18年間お付き合いした患者さんとあいさつ一つできないままのお別れとなりました。私の仕事を引き継ぐ心理士は新卒の22歳。新年度からの混乱を予測できてもどうすることもできず異動の準備に忙殺された年度末でした。淡路の心配ばかりしていた私ですが、光風病院に移ってからは公務員として当たり前の業務も知らない己の実態に

衝撃の連続でした。「決裁」の手順に始まりデイケア運営の実際、施設の維持管理、運営協議会や診療連絡会議などの多種多様な会議などは19年目にして初めて経験することばかりでした。

現在、地域ケア部デイケア科の主任を務めています。デイケア科での勤務はもう6年になります。デイケア科では看護師・作業療法士・精神保健福祉士・臨床心理士の4人のスタッフが、毎日平均30人前後の利用者さん(統合失調症や気分障害、そのほか精神科外来通院中の成人)を迎えて、再発予防、生活支援、社会復帰を目標に1日6時間の集団療法を実施しています。具体的には、スポーツ、レクリエーション、心理教育、手工芸、料理、認知行動療法など、体調と気分に応じて参加できるように、毎日、午前と午後に複数のプログラムを提供しています。スタッフの専門性はそれぞれ違っていても、患者さんが生活している当たり前の姿に寄り添い、本人の生き辛さに気付き希望を感じ取る姿勢は同じです。「一対一の心理面接」が得意な臨床心理士ですが、そこに留まらず、多職種チームで考えることでより包括的な支援が可能になると実感する毎日です。

先に記した「臨床心理士に求められる専門行為」4つのうち、淡路病院では①を中心に、光風病院では②と③について実践し経験を積んでいるところではないか、と思います。これからは④の臨床から学んだ知識を次の世代に伝えていくことも視野に入れて研鑽する必要があるでしょう。書籍の活用に関しても、今後は受信媒体から発信手段へと徐々に役割を担うことになるのかも知れません。

2013年4月現在、医療系大学院2校で「乳幼児支援特論」「親子関係発達論」の講座を持ち、後進の育成にもかかわるようになりました。

### Ⅳ. 臨床心理士の現状

臨床心理士になるためには、指定大学院を卒業して臨床心理士資格認定試験を受けて資格を取ることが基本条件です。しかし、時間と情熱

をかけて資格を得ても就労先を選べるほど十分な雇用がないのが現状です。臨床心理士が国家資格でないため、医療現場で「保険点数」が取れないのも理由の一つと考えられます。臨床でのニーズは高く、長い間懸案となっているのに国家資格化できないその一番の理由は、臨床心理士はさまざまな分野（教育・福祉・司法・産業など）にいて、医療に特化した資格にすることが困難だからです。今後、病院で「コメディカルスタッフ」として認知され、多職種チームの一員として責任を持って活動していくためには、やはり看護師や作業療法士、精神保健福祉士のような国家資格化が必要となると思います。医療以外の領域で活動している仲間の妨げにならないように、慎重に吟味し工夫しながら資格

化を進めていくことも、私たち中堅臨床心理士の役割と考えています。

#### V. おわりに

こころを対象に学ぶ専門職として、私たちは「心の中にあるものは定まらずわかり辛い」という事実をわきまえ、今日もまた臨床で「わからない」ことに眼差しを向けています。先人の知恵を拝借し、困難な事例から学び、励ましや労いを受ける数多くの書籍の支えがあつてこそ、答えのない問いを抱えつつ、目の前の人に真っすぐ向き合えると思います。これからも、自分自身の健やかな状態を保ち、新しい知見を得るためにも、図書館とのお付き合いを大切にしたいと思います。